

[書評]

Вера Вутова-Стефанова, Евгений Кандиларов
България и Япония - политика, дипломация, личности и събития,
София: Изток и Запад, 2019, 638 с.

ヴェラ・ヴトヴァーステファノヴァ、エヴゲニー・カンディラロフ
『ブルガリア・日本 — 政治、外交、人物、出来事』
(ソフィア：イズトク・イ・ザパド、2019、638 頁)

ヨフコバ四位 エレオノラ

2019 年は、日本とブルガリアの外交関係にとっては「3 つの周年」、すなわち「外交開始 110 周年 (1909 年)」、「外交関係樹立 80 周年」(1939 年) および「外交関係再開 60 周年」(1959 年) が重なる記念の年である。*България и Япония - политика, дипломация, личности и събития* は、その「3 つの周年」に捧げられた著書である。著者であるヴェラ・ヴトヴァーステファノヴァ氏とエヴゲニー・カンディラロフ氏は、長年、前者が外交官と日本研究者、後者が日本研究者の立場で両国関係にかかわってきた豊富な経験を持つ人物である。

638 ページにもわたる本書の一番の魅力は類例のない詳細な記述および豊富な情報である。ブルガリア中央公文書館、ブルガリア外務省公文書局、日本外交史料館、国立公文書館アジア歴史資料センター等に保管されている数々の資料、また当事者の個人的記録やインタビュー、さらに著者の個人的経験をもとに、両国関係に関わる諸分野での出来事や人物が、両国間の交流の始まりとされる露土戦争 (1877-1878) を起点に年代順に並べられ、記述されている。また、記述には多くの貴重な写真が添えられており、本書は、両国関係の記録として今までにない貴重な情報源となっている。著者の記述によれば、本書の目的の一つは、時代の流れとともに変化してきた日本とブルガリアの関係、また両国間の交流に貢献してきた人物を詳細に描き出し、両国の関係の特徴を正確に伝えるということである。

本書は 7 章から構成されている。以下ではそれぞれの章の要点を紹介したい。

第 1 章 (「交流開始前史から」、100 ページ) では、19 世紀後半から 20 世紀初頭までの両国間の交流およびその交流に携わった人物について取り上げられている。第 1 章には、今まで詳しく知られておらず、クローズアップされていなかった交流開始前の時代について多くの情報が記載されており、その時代の貴重な資料となっている。

第 1 章では、世界の歴史的出来事を背景に、この時代に両国関係の交流に貢献した

人物とその活動が明細に描かれている。

ブルガリアの地を最初に踏んだとされる日本人は露土戦争（1877-1878）でブルガリア北部に位置するプレーヴェンという町の戦線の露軍に観戦武官として従事していた陸軍少佐の山沢静吾である。次にブルガリアを訪れたのは、1900年にウィーンからイスタンブールに向かう途中で、ブルガリアに立ち寄った閑院宮載仁親王である。両国の皇室・王室間の交流が本書の大きな焦点となっており、皇室・王室関係者の訪問は本書の中で特に注目されている。閑院宮載仁親王の訪問に続き、1909年に久邇宮邦彦王がブルガリアを訪問し、そのとき両国間で交換された公文書が外交の始まりとされる。

第1章で注目されるさらなる人物は徳富蘆花である。偶然にも、蘆花がブルガリアを訪れている年（1906）には、ブルガリアで「不如帰」の英語からのブルガリア語訳が出版された。

一方、同時代に訪日を果たしたブルガリア人はまだ少なく、日本の地をはじめて踏んだ人物として名前が残っているのはアントン・ボズコフ将校である。ボズコフは自らの印象を *Пътъом през Япония*（「日本を通り抜けて」）という紀行に記している。

第1章は、両国関係に関わった出来事や人物とならび、この時代の日本とブルガリアのそれぞれの歴史的状況についても詳しく記述し、歴史的資料としてもきわめて大きな価値がある。

第2章（「外交関係樹立に向けて」、40 ページ）は、外交関係樹立（1939）にいたるまでのプロセスおよびそれに関わった人物を辿っているものである。外交関係を結ぶことに貢献した人物としては、小幡酉吉、外交樹立のための交渉に携わった日本側の関係者である村上義温およびブルガリア側の関係者であるニコラ・アンドノフ、また日本の外交官（重光葵、酒匂秀一、東郷茂徳）、そして両国間の関係に欠かせない皇室の関係者（高松宮宣仁親王と妃殿下）の訪問に焦点が当てられている。

第3章（「第2次世界大戦中の外交と人びとの運命」、70 ページ）では、外交樹立および第二次世界大戦中の両国の関係（1939年-1944年）について取り上げられている。

ソフィアに日本の公使館が設置されたのは1939年であり、その初代特命全権公使には蜂谷輝雄が着任した。一方、東京にブルガリアの公使館が開設されたのは1942年であり、初代特命全権公使としてはヤンコ・ペエフが着任した。しかし、ヤンコ・ペエフの着任からわずか3年後、1945年1月8日には、あいにく、在京ブルガリア公使館が閉鎖され、両国の外交関係は一旦中断される。

第4章（「鉄のカーテンによる分断から新たな始まりへ」（1945年-1959年）、10 ページ）は本書の中では最も短い章である。それには、当時の両国関係がほとんど発展しなかったという、歴史的状況に深く関わる理由がある。

第5章（「冷戦時代における政治的プラグマティズムと互惠協力と文化交流」（1959年–1989年）、180ページ）は、本書では最も長い章である。1959年に日本とブルガリアの外交関係が再開し、その後、日本とブルガリアは異なる国家体制を保ちながらも、40年間にわたり活発な交流を続けてきた。

人物の交流および世界の歴史的出来事が中心となっている第1章–第4章に対し、第5章においては、様々な分野、すなわち政治、経済、貿易、文化、教育、スポーツなどにおける両国関係が詳細に描き出されている。

1959年の外交関係再開に伴い、日本とブルガリアそれぞれに大使館が設置され、政治関係、経済関係、貿易関係の発展のための基盤作りが始まる。ブルガリアは時代の遅れを取り戻すために、新しい経済政策に取り組み、生産力の改善のモデルとなる国との交流を積極的に求めはじめる。そのモデルの一つとなったのは日本である。1970年にブルガリアの最高指導者であったジフコフ共産党書記長が大阪万博を訪れ、日本の著しい発展に感銘を受け、帰国後、日本との外交促進に尽力した。1974年には当時通商産業大臣であった中曽根康弘がブルガリアを訪問し、1983年には安倍晋太郎外務大臣の訪問が日本外相初の訪問となった。また、ジフコフ共産党書記長は、大阪万博に続き、1978年には2回目、1985年の筑波万博には3回目の日本訪問を果たした。

政治関係の強化は、貿易を通じて経済関係の発展につながった。経済関係の発展に大きく貢献したのは「明治（株）」であり、大阪万博（1970）に出展されていたブルガリアヨーグルトが人気を集め、のちに、日本でブルガリアを象徴するヒット商品となった。

この時代には、文化交流や教育面での交流も活発となった。文化や教育での交流は多くの個人の活躍（元NHK会長の前田義徳、東海大学創立者の松前重義、初の女性代議士の園田天光光、ベースボール・マガジン社の創立者の池田恒雄、数多くの音楽家、翻訳家、両国の特命全権大使など）によって築きあげられ、支えられてきた。冷戦時代は文化交流にとっては最も輝かしい時代であり、数え切れないほど多くの文化交流が実現できた時代である。本章では、この時代において記録すべき文化交流、出来事、またそれらに関わった人物について、可能な限り多くに言及されており、類例のない詳細な記述が施されている。

第6章（「新たな次元のパートナーシップ」、110ページ）では、1989年から今日までの両国間の交流が取り上げられている。1989年はブルガリアにとっても日本にとっても歴史的にターニングポイントとなった年である。ブルガリアは民主化・市場経済化の時代に、日本は新しい平成時代に突入した。また、ブルガリアは2007年にヨーロッパ連合に加盟し、EUの他の加盟国と肩を並べ新たに歩み始めた。本書では、この時代は、「両国間交流の伝統継承とさらなる増進」の時代として定義されている。つまり、

両国間で築きあげられてきた良好な関係の伝統が引き継がれていく一方、政権交代や経済形態の変化に伴い、新たな枠組みでの交流の可能性が開かれたという意味での増進である。その象徴となったのは、新たな時代にも受け継がれてきた多くの要人の訪問である。2018年には日本首相初（安倍晋三）のブルガリア訪問が実現した。両国要人の往来は現在も活発に続いている。

ブルガリアが市場経済へ移行したことによって、貿易や投資にもさらなる可能性が開かれた。

また、文化・教育分野においても交流が深まり、ブルガリアには日本の専門家を育成する多数の組織が設立され、毎年多くの専門家が世に送り出されている。

本書のさらなる貴重な点は、資料編には多くの資料が提供されているということである。以下がその資料のリストである。

1. 駐日本ブルガリア外交使節団長一覧（1ページ）
2. 駐ブルガリア日本外交使節団長一覧（1ページ）
3. 駐日本ブルガリア名誉領事一覧（1ページ）
4. 両国要人往来：国家元首、国会議員、政府高官（2ページ）
5. 両国政府交換公文書一覧（2ページ）
6. 文献目録
 - 第1部 日本人著者によるブルガリアに関する文献（28ページ）
 - 第2部 ブルガリア人著者による日本に関する文献（34ページ）
7. 翻訳図書目録
 - 第1部 ブルガリア語図書の日本語訳（10ページ）
 - 第2部 日本語図書のブルガリア語訳（32ページ）

日本とブルガリアは地理的に離れている国であるが、民族性や歴史的プロセスには多くの共通点がある。100年余りの交流の中、両国は常に尊重し合い、理解し合えるように努力を重ねてきた。本書は両国のそういった努力や相互理解を伝えようとするものである。